



事例 3 新大阪歯科技工士専門学校

「生涯サポート」という学校理念を支える同窓会

学校と卒業生とが長く、良好な関係を保ち続けるという点で1つの理想的なカタチを築きあげている学校がある。日本で有数の専門学校グループである滋慶学園が最初に立ち上げた専門学校、新大阪歯科技工士専門学校(以下、新大阪歯科技工)である。

1976年の開校以来、歯科技工士の養成校として業界の評価が高く、歯科技工士国家試験合格者数は毎年全国最多、就職率も毎年100%を達成。卒業生は4575名、数からいけば、全国で約35000人といわれる歯科技工士の10%以上を占める。

昨今、日本では歯科技工士養成校の卒業生の就職状況が芳しくないこともあり、養成校自体が減少傾向にある。現在、歯科技工士専門学校は全国で60数校あるが、そのなかで100名以上の定員を持ち、その定員が完全に埋まる

図1 同窓会の特色

- 卒業生全員同窓会入会の原則
- 運営財源の確保(年会費→終身会費)
- 同窓会組織構成(卒業生OBの積極関与)
- 支部会組織の展開(全国14支部の構成)
- 生涯教育の実施(OBへのサービス提供)
- 学校全体の協力体制(事務局の設置)

のは新大阪歯科技工(I部90名、II部60名)のみ。しかも、3月まで待っても定員割れしてしまう学校が多いにもかかわらず、新大阪歯科技工は10月頃には充足するという。

「少子化の影響などもあり、定員の半分も集まらない学校が多いと聞きます。うちは同窓会がしっかりしているせいで業界の評判も良く、若い人に『歯科技工士になるなら、新大阪歯科技工がよいのでは』と勧めてくださる業界関係者が結構いらっしゃるんです」(新大阪歯科技工士専門学校 満尾宏史次長)

学生募集にも絶大な影響力を持つという新大阪歯科技工の同窓会とはいかなるものか。その内側を覗いてみたい。

苦労が多かった同窓会黎明期

新大阪歯科技工の同窓会は、開校とほぼ時を同じくして、いまから30年前に誕生した。その頃の同窓会運営は、苦労が絶えなかったという。

まず、会費が集まらない。当時は年会費制で卒業生から毎年集めることにしていたが、徴収がうまくいかない。そんな状況でも卒業生の知識や技術の向上は欠かせないと考え、当時は業界でもめずらしかつた学術講演会や実技研修会を同窓会が主催した。けれども資金が足りないため、やればやるほど経費がかさみ、赤字になった。ソフトボール大会やボウリング大会などさまざまな親睦会を開

いて会員集めや資金集めに奔走した。

新大阪歯科技工のII部一期生であり、同窓会発足5年目から現在まで25年間にわたって会長を務め続け、この同窓会最大の功労者ともいえる中島元会長は次のように語る。



新大阪歯科技工士専門学校の同窓会会長 中島元氏

「私は30歳で夜間部に入学したのですが、すでに子どもも大きく、学校にはとてもご苦労かけました。熱心に教えていただいたおかげで、卒業後すぐに歯科技工所を開業することもできました。そのご恩返しのため、学校や若い人たちの力になろうと、25年間会長を務めてまいりましたが、最初はお金の苦労もかなりあり、つらい時期もありました。それと、当時の経営層は、同窓会活動にはあまり理解を示されなかったのです」

その状況が変わったのは23年前、新大阪歯科技工の経営者が変わってからだ。母体である滋慶学園は、グループすべての学校で、学生の「生涯サポート」を公言、実行している。そのポリシー通り、新大阪歯科技工の同窓会活動にも生涯サポートを実現するために学校側が積極的に関わっていった。

たとえば支部会。滋慶学園グループ宮川藤一郎副理事長より中島会長に対して、卒業生に対してきめ細かい対応をしていくには支部を立ち上げたほうがいいのではないかとアドバイスがあった。しかし、同窓会だけのパワーで支部会を運営することはむずかしいと中島会長が告げると、学校が専任者を出してくれるという。ならばということで、中島会長の出身地である奈良で、まずは奈良県人会を立ち上げて1年間活動した。その成果を見て、翌年から近畿地方を中心に次々と支部会をスタートさせていった。またこの時、会費も年会費から、卒業時に集める終身会費に変更した。その徴収も同窓会ではなく、学校側で行うようになった。

「同窓会は将来、学校の大きな財産になる。だから同窓会組織をしっかり固めていこう、そのためには教職員が全面的に協力していこう、というのが滋慶学園創立時からの方針でした」(満尾次長)

そのような体制の下、新大阪歯科技工の同窓会活動はいよいよ活発になっていった。

同窓会で卒業生と在校生が交流

現在の同窓会活動の概略を示そう。組織としては全国に11支部を置いている。その多くが西日本にあり、大阪ブロックを本部として近畿には京都・滋賀ブロックや奈良・三重ブロック、和歌山ブロックがあり、中国は3ブロック、四国も2ブロック、九州・沖縄で2ブロックと西日本だけで11支部を数える(図2)。

総会を毎年4月に開催し、各支部も年1回秋頃に支部会を開く。総会の際に各支部会の日程表を同窓会から学校の教務部に提出し、学校側の都合も考慮して各地の日程が決まっていく。前述したように、各支部にはかならず1人以上、学校の教職員が担当者として入っている。教職員が担当する支部は自分の出身地である場合が多いので、担当者はほぼ固定されている。日程が確定すれば開催場所は学校担当者が押さえ、案内状は同窓会が出す、といった段取りで進んでいく。

「そこに在校生も参加できるというのが、学校にとっては

図2 支部運営システム

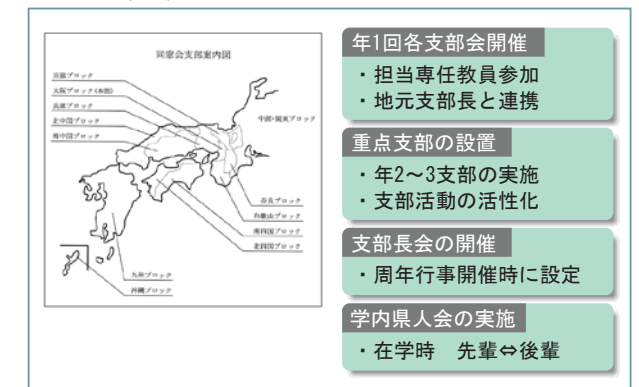


図3 支部会活動内容

- 学術講演会(OB・著名講師の招聘)
- 実技研修会(関連業者への依頼・設定)
- 情報提供・交換(母校⇄地域OB)
- 在校生・卒業生の就職活動
- 地元業界との関係作り(歯科技工士会・歯科医師会)

非常にありがたいです」と満尾次長は語る。各地の支部会には最終学年の在校生も参加するのだ。

在校生の参加費は無料。同窓会と学校が折半するかたちだ。その場で先輩後輩が顔を合わせ、生徒の就職相談に先輩たちが応えてあげるような関係ができあがる。この仕組みは生徒の就職を支援したい学校にとってありがたいだけでなく、歯科技工所を経営している卒業生などにとっても得がたい機会である。そしてもちろん、地元就職などを考えている生徒にとっても貴重な場になっているという。

そうした活動の一方で、毎年支部の役員には学校から卒業生の連絡先が渡され、それをもとに支部の名簿がリニューアルされる。生徒の就職の世話や卒業生の転職に関する相談など、学校と支部、支部と卒業生といった相互の連携もスムーズに行われる仕組みだ。

同窓会は各支部の運営が滞らないような手も打っている。11支部の中から毎年2〜3支部を重点支部とし、活性化をはかっているのだ。重点支部に指定されたブロックは、OBや著名人を招いて行う学術講演会や実技研修会などをその年に実施することが義務付けられる。そうした持ち回りの活動によって、支部の中でも活発な意見交換や交流

広島支部会での研修会の様子



歯科技工だけでなく、手話などの研修会を行うことも

がはかられることになる。

こうした組織だった活動ばかりでなく、日頃から学校と同窓会とのコンタクトは多い。たとえば新大阪歯科技工の体験入学を受けたものの、歯型の石膏がうまく削れずに悩むような高校生がいる。そういう生徒には「ここでも教えてくれるよ」とその高校生の近所の卒業生(歯科技工所)を紹介し、現場を見せたりする。学校からのそんな要望にも卒業生たちは気軽に応じてくれるという。あるいは、支部会員たちからの紹介で入学者が来ることもしばしばあるという。同窓会はさまざまなかたちで学校運営をサポートしているのである。

卒業生の学習ニーズを汲み上げる

一方、学校側の対応も極めて積極的である。新大阪歯科技工は年間を通じて、ほぼ毎日学校を開いている。在校生や卒業生に対して、施設を常時開放しておくためだ。

「学校の事務局スタッフのみなさんはほとんど休まず、いつもがんばっています。卒業生のほうもそれを知っていますから、学校にできるだけ協力したいと思うのです」(中島会長)

学校は卒業生に対して、空いている教室などは常時気兼ねなく使ってもらっていいと伝えている。無論、無料である。そのため、卒業生が学校の施設を使って勉強会や講習会を開くことができる。そんな時、他校の卒業生も新大阪歯科技工を訪れることになる。温かく、協力的な学校の姿勢に多くの人が驚き、学外者も含めた業界全体の中で新大阪歯科技工のファンは増えていく。

また、新大阪歯科技工は卒業教育に非常に熱心に取り組んでいる学校としても有名だ。それは、滋慶グループのポリシーである「生涯サポート」を忠実に実行しているということでもある。しかし、それとは別に「歯科技工士」という職業ならではの事情もある。

義歯や金冠などの補綴(ほてつ)物を製作するのが歯科技工士の仕事である。就職先としてもっとも多いのはラボ(歯科技工所)。ラボとは歯科医院から預かった患者さんの歯形をもとに補綴物を製作するところだが、そうしたところに数年間勤め、一定の技術を身につけて独立する人も多い。収入という点では、自分のラボを運営するほうが有利である。自分の技術の向上や、独立を視野に入れた歯科技工

士であれば、新しい技術の習得のために卒業後も学び続けなければならない。そこに学校が卒業教育を提供する意義がある。

さらに昨今、医療現場は大きな変革を迫られている。たとえばインフォームド・コンセント「なぜこの治療が必要なのか」「どれくらいの期間や費用がかかるのか」といったことを医師がわかりやすく説明し、その上で患者さんから同意を得ることが歯科医療においても必然となってきた。それにより患者さんの知識が増し、医師に対するシビアな選択眼を持つようになり、歯科医師が選ばれる時代となった。同時に歯科技工士も歯科医師から、これまで以上に厳しく選別される時代になったのだ。つまり「優れた」補綴物を作ることのできる歯科技工士は繁盛するが、そうでない歯科技工士の活躍の場は限られていくということを意味している。

卒業生の側には技術向上の必然的学習ニーズがあるわけである。ならば学校はそのニーズを汲み上げて、学習の機会を提供すべきだというのが新大阪歯科技工のスタンスでもある。そこで新大阪歯科技工は卒業後の期間に応じ、その時期に必要なテーマ別に数多くのコースを開講している(図4)。いずれも有料であるが、ももとの料金設定が低いうえに、卒業生であれば同窓会から半額補助があるという。

同窓会運営も、経営者のやる気がすべて

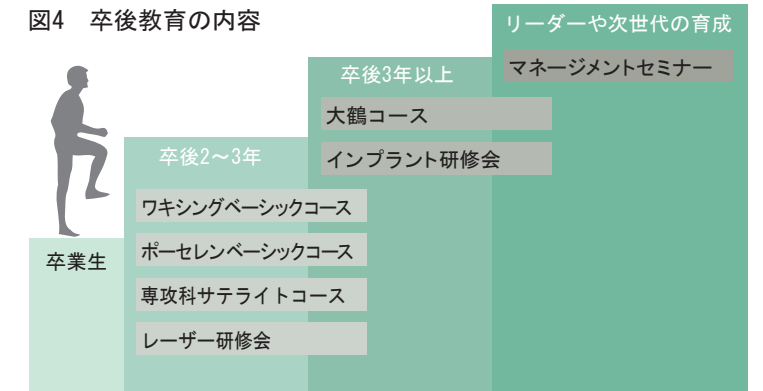
こうした学校と同窓会との非常に良好な関係を、象徴的に示すエピソードがある。

新大阪歯科技工士と母体の滋慶学園は、今年創立30周年を迎えた。しかし、学校も、学園も、記念式典のようなものは一切行わないという。ただし、同窓会の30周年式典は、盛大に行われる。

「学校のほうでは『学園30周年のあゆみ』という記念ビデオと、記念の名刺入れをつくったくらいです。それよりも同窓会のほうを派手にやってあげたいというのがわれわれの気持ちです」(満尾次長)

無論、30周年を「口実」に学校が同窓生に寄付金を募るということもない。逆に学校は同窓会の30周年を祝って、同窓会に対して寄付金を贈るといった。かたや同窓会側は、

図4 卒業教育の内容



式典の運営に協力してくれる学校の教職員に対して感謝状や記念品を贈る。どこまでもお互いを尊重し合い、高め合う、持ちつ持たれつの関係が成立しているのである。

滋慶学園には、学校を取り巻くすべての人が「キーパーソン」という文化があるという。在校生、卒業生、教職員、そのすべてによって学校文化ができあがり、それに共感した人がまた新しく入ってくるという循環をつくりたい。それが滋慶学園グループの浮舟邦彦理事長の理念であると満尾次長は語る。

「経営環境の厳しい時代だからこそ、在校生だけでなく、卒業生にもサービスを行い、すべての人の満足度を高めていくことがこれからの学校運営では常識となっていくのだと思います。いま学校にそうした文化がないのだとしたら、経営者の鶴の一声が必要でしょう。経営トップにその意気込みさえあれば、状況は変わっていくはずですよ」

同窓会を25年間まとめ続けている中島会長も、信念があり、理解のある経営者の存在がこれまでの活動の原動力になったと語る。

「理事長をはじめとする経営者のみなさんが日頃からしっかりお話を聞いてくださり、教職員の方々も喜んで協力してくださる。だからわれわれもここまでやってこれたのです。私が卒業した時分は『なんや新大阪か』と言われました。いまは『さすが新大阪やな』と。ありがたいことです」

今後は新大阪歯科技工の同窓会で得た実績を生かし、滋慶グループ全体の同窓会組織を充実させ、ネットワーク化し、横のつながりもある磐石の組織体制を築く方針だ。